



TITLE:

<學界展望>中央アジア・テュルク 民族史研究の展望

AUTHOR(S):

堀川, 徹

CITATION:

堀川, 徹. <學界展望>中央アジア・テュルク民族史研究の展望. 東洋史研究 1976, 34(4): 616-624

ISSUE DATE:

1976-03-31

URL:

<https://doi.org/10.14989/153602>

RIGHT:

學界展望

中央アジア・テュルク民族史研究の展望

堀川 徹

わが国における、中央アジア・テュルク民族史研究は、總じて、未發達の段階に停まっているといえる。それは、何と言つても、研究者の絶対数が不足している爲ではあるが、その他にも、二つの原因が考えられると思う。

その一つは、史料の問題であらう。

塞外史研究、西域史研究という形でスタートしたわが國のテュルク民族史研究、中央アジア史研究は、その名が示す通り、漢文史料を最大の據り所として發達してきた。その爲、漢文史料の豊富な、或いは、他史料の利用しにくい時代・地域に研究が集中してきた。時代的には、唐代以前や清朝統治時代が、地域的には、「東トルキスタン」を中心とする中國周邊地域が、主としてその研究對象となつていた。例えば、護雅夫『古代トルコ民族史研究』(東京 一九六七)は、塞外史研究の傳統を踏まえつつも、それに、テュルク文獻學の成果を存分に利用してまとめられた大著で、テュルク古代史研究を代表するものといえる。「西突厥」に關する記述が無いと

の批判も、著書名が「一」となっていることから推して、今後、解答がなされるものと思われる。また、佐口透『一八一—一九世紀東トルキスタン社會史研究』(東京 一九六三)は、羽田明氏に始まり、佐口、嶋田襄平兩氏の参加をみて盛んとなった、清代の東トルキスタン史研究の成果と考えられる。

こうした著作にも代表されるように、わが國の研究者は、漢文史料を驅使して、今世紀最大の中央アジア史家バルトリドも手の届かなかった領域で、着々と世界的レヴェールの研究成果をあげてきた。しかし、漢文史料の威力が及ばない領域へ一歩足を踏み出せば、その研究は全く微々たるものである。漢文史料に比べて、當該地史料は、絶対量が少ない上に、極めて入手しにくかったことと、そうした史料を使いこなせなかったことが最大の原因であつたと思われる。こうした中で、羽田亨氏に始まり、山田信夫氏らを中心として進められてきたウイグル文の經典・文書類の研究が、ひとり高水準を保っているのは、大谷コレクションがわが國に存在しているからだと言つても過言ではあるまい。

以上より、研究水準の低い理由の一つは、研究に不可欠な當該地史料の利用が不充分であつた爲と言えよう。しかし、近年、各地への留學も盛んとなり、語學の障壁は徐々にではあるが解消されてきている。また、ソ連邦やイランを中心として、新しく、史料類が刊行され、考古學・民族學の調査報告がなされる一方、古くに出版された史料や古典的研究書も、リプリント版で容易に入手することができるようになった。例えば、*Bābur-nāma* は、十年程前までは、英譯本さえも稀少であつたが、今ではリプリントのお蔭で、寫本のファクシミリ版を利用することができる。また、バルトリドの研究

にも、八巻を数える「選集」が刊行されて、現在では容易に接することができるようになった。が、ソ連邦等に所蔵されている未公開史料の膨大さを想えば、史料の問題は、好轉しているとはいえ、未だ依然として大きな障害であることに変わりはない。關係諸機關の盡力が期待される。

第二に、研究者自身の持つ問題意識について考えてみよう。

從來の中央アジア研究は、一九七〇年の史學雜誌「回顧と展望」で、榎本方雄氏が、「シルクロードを中心とする東西交通路の通過地として位置づけられる中央アジア史」であったと述べているように、「シルクロード的」發想に基づいた研究が主流を占めてきた。中でも、歴史的地理學的研究には多くの優れたものが見られる。松田壽男『古代天山の歴史地理學的研究』（東京 一九五六）は、長澤和俊氏の言を借りれば、正に、「明治以來、長い傳統を有する西域史地學は、ここに一つのピークに到達した」著作であった。また、學問的研究とは別に、シルクロードに對する一般の人々の關心も非常に根強いものがある。書店の店頭に、「シルクロード……」「東西交流……」といった書籍を見ぬ時はないし、雑誌『月刊シルクロード』の發行部数は數萬部に達したと聞く。世人の憧憬にも似たシルクロードへの關心は、近年、ますます強くなってきたようである。こうした傾向は、中央アジア像がゆがめられた形で紹介されるのではないかと懸念はされても、我々にとって誠に心強い限りである。が、一方、それに迎合するかのように、『シルクロード』と名付けさえすれば……といった、いわゆる「學問的」著述が見かけられるのも事實である。

ところで、このような「シルクロード的」關心が、中央アジア諸

民族史研究の發展を阻害しているとの批判も起こってきた。

一九六八年榎本氏は、『アジア文化研究』創刊號で、同研究會の研究方向を述べつつ、非ヨーロッパ・非中國的地域の社會を研究するには、非ヨーロッパ・非中國の視點を求めると提起した。^④これを受けて、一九七三年の史學雜誌「回顧と展望」で、森安孝

夫、梅村坦兩氏は、「それぞれの地域や民族を『東西南北との交渉・對立』の中心に据え、その地域ないし民族自身の歴史を内側から構成していく方向」で研究すべきであると主張した。こうした意見に代表される若手を中心とした動きは、從來の「シルクロード的」視點を痛烈に批判して、中央アジアそのものを中心に見据えた研究をめざそうとするものではあるが、その大上段に振りかぶった刀をどのように振り下ろすか、すなわち、各自の問題意識を研究の上にどう具現化するかについては、決して解答が得られたとはいえない。しかし、筆者としても、中央アジアの住民の立場に立とうと志向する研究態度によつてのみ、中央アジア・テュルク民族史研究の停滞的現狀は打破されていくものと確信している。

さて、以上述べてきた事を踏まえて、今後研究を進めていく上で心しなければならぬと思われる、その前提條件ともいえる事柄を自分なりにまとめてみたい。

まず、中央アジア・テュルク民族史研究には、量の多少はあるにしろ、必ずや、當該地住民の遺した史料が必要である。それなくしては、研究も進捗しないし、また、それなしの研究は無意味である。研究對象となる民族なり地域なりの遺産を利用することが、研究者に課せられた第一の條件であらう。

第二に、利用する史料の批判がなされなければならない。そして

更に、その史料を如何に扱うか、どのように利用するかについて、自己の立場を明らかにすることが必要であろう。すなわち、ここでは、自分の持つ問題意識を、史料を通してどのように研究と結びつけるかが問われてくる。第一の条件と第二のそれとは、正に、表裏一體をなしており、各自の研究姿勢に深く関わってくるものと思われる。

そして、第三に、研究に必要な、いわゆる周辺科學の基礎知識修得が絶対の条件である。特に、フィロソフィカルな知識の修得——決してフィロソグとしてではなく、歴史家としてのそれ——は、言語が多岐に亘る中央アジア史研究には不可欠の条件であろう。

以上三點は、何も殊更に述べたてたまでもない極く常識的な事柄である。が、その常識が、果して、「學界」の常識として受け入れられ、すべての研究に生かされていたであろうか。研究が、あくまで研究者の主體性に關わっていることを知りつつ、あえて、常識的とも思われる事柄を持ち出したのは、こうした前提条件を確認した時、自ずから、今後の中央アジア・テュルク民族史研究の展望は開けてくるものと考ええるからである。

二

ここでは、前節で述べた三條件に沿った研究を、一九六九年以降を中心として整理してみよう。この年を區切りとするのは、一つには、一九六九年から七一年にかけて發刊された『岩波講座世界歴史』に、ほぼ、従前の研究成果が收録されているからであり、もう一つには、いわゆる「大學紛争」と並行して、前節でも觸れたように、「アジア文化研究會」等に代表される若手研究者の、新しい研

究視点を求める活動が活發化し、それが、様々な形で「學界」に影響を與えたと思われるからである。

ところで、中央アジアのテュルク民族史を眺望すると、二つの大きな流れの存在に氣付く。その一つは、十一世紀を中心としたテュルク族の民族移動——東では、いわゆる「トルキスタン」が成立し、西では、オグズ族がセルジュク朝やオスマン朝などの國家を建設する——である。他の一つは、モンゴル帝國の興亡の中から新たに形成されていったテュルク民族の動き——東では、モグーリス・タタール汗國からホジャ家の支配時代を経て清朝の新疆省統治へと續き、西では、ティムール朝の成立とウズベグ族、カザフ族の民族形成から、いわゆる「シャイバーニー朝」「ウズベク三汗國」時代を経てロシアの中央アジア支配に至っている——がそれである。以下、これら二つの流れに従って述べてみよう。

中央アジアのウイグル族に關する研究は、羽田亨氏に始まり、安部健夫『西ウイグル國史の研究』（京都 一九五五）に於いて、一つの歸結點を見いだした。そして、そこを新たな出發點として、現在の研究方向が導き出されていることは、確かに、山田氏の指摘している通りであろう。例えば、森安孝夫「ウイグルと吐蕃の北庭爭奪戰及びその後の西域情勢について」（『東洋學報』五五—四 一九七四）は、安部氏らの研究を踏まえ、氏の説を支持・補強したものである。また、山田信夫「トルキスタンの成立」（『岩波・世界歴史』六 一九七〇）は、安部氏の西ウイグル大帝國説や、カラハン朝ウイグル説を批判したものであった。

一方、「A・A研」の「イスラミ化研究會」を中心として、中央アジアのイスラミ化に關する研究も活發に行なわれた。間野英二

「中央アジアのイスラム化」(『イスラム化にかんする共同研究報告(續)』(東京 一九六九)、『トルコ族とイスラム』に關する共同研究報告』(東京 一九七四)に收録された羽田明、小田壽典兩氏の報告、更に、羽田「イスラムとトルコ民族」(『オリエント』一四—二一九七二)等が、活動の成果として發表された。中央アジアのテュルク化・イスラム化の問題は、研究者にとって不可避の研究課題となつてきている。

こうした状況下に、護氏は、『中國文明と内陸アジア』(東京 一九七四)の一節として「トルキスタンの成立」(傍點筆者)を著わした。題名にも現われているように、前掲山田氏の説を批判したものである。そこで、氏は、東トルキスタンの成立については山田説を支持するが、バミール以西が嚴密な意味で「トルキスタン」となるのは、ウズベク族が十六世紀初頭にティムール帝國を瓦解させ、シルダリア以南の地に定住するその時まで待たねばならなかったと述べている。氏の見解は多分に直観的ではあるが、無視できないものを含んでいる。というのは、十六世紀初頭に記されたウズベグ史料には、護氏の主張を裏付けるような記述が見られるからである。そこに現われる「トルキスタン」「トルキスタン地方」といった呼稱が指示しているのは、ヤス(現トルキスタン市)、スイグナク、スザク等の町を中心としたシルダリア中流域の地方なのである。これに對して、いわゆる「西トルキスタン」には、終始マー・ワラー・アンナフル *Mawar' al-nahr* の名稱があてられている。とすれば、護氏の設定した一六世紀初頭において、少くとも當時のマー・ワラー・アンナフルの知識人の意識する「トルキスタン」は、未だ、シル河以北の地であつたわけである。が、問題は更に多

岐に互るので、稿を改めて論じたいと考えている。

ウイグル族に關するもう一つの研究傾向として、文書・經典類の基礎的研究があげられる。森安孝夫「ウイグル佛教史史料としての棒杭文書」(『史學雜誌』八三—四 一九七四)は、棒杭に記された漢文の解讀を、小田壽典「ウイグル文殊師利成就法の斷片一葉」(『東洋史研究』三三—一 一九七四)は、大谷コレクションのウイグル文二六九五の解讀を試みたものである。また、小田氏がその奥書について觸れた大英博物館所藏 *Or. 8212* 文書は、庄垣内正弘「ウイグル語寫本・大英博物館藏 *Or. 8212* (109) に關して」(『東洋學報』五六—一 一九七四)で研究されている。

經典類の研究と並んで、文書類のそれも山田氏を中心として盛んに行なわれている。その研究史については、山田信夫「ウイグル文書・資料と研究」(『中央ユーラシア文化研究の課題と方法』(豐中一九七五)に詳しいのでここでは重複を避けるが、山田氏の精力的な文書資料の紹介・研究は、世界の學界でも高く評價されている。こうした基本的な研究を通じて得られた成果が、歴史研究の場に生かされるようになればすばらしい限りである。「今後のウイグル文書研究の課題は、歴史研究資料として廣く利用できる形になること」と、氏自身も述べているが、我々も期待するところ大である。

一方、從來、わが國の研究者にとつて、正に「屋根」であつたバミールを西へ越えた研究も、わずかずつではあるが現われ始めた。服部直人「サーマーン朝家系上の諸問題」(『オリエント』一八一—一九七五)は、ペルシア語・アラビア語の文獻資料に、貨幣學の手法をとり入れた研究で、サーマーン朝がトルコ系王朝であつたと、從來のイラン系説を否定している。氏の精力的な文獻涉獵には

驚ろかされる。今後の活躍が期待されるところである。同『晩秋のヘラート』（京都 一九七五）は、ガズナ朝史料として知られるバイハーキーの作品のヘラートに關する部分を邦譯したものである。

オグズ族の傳承を紹介・翻譯した、本田實信・小山皓一郎「オグズ・カガン説話」、『北方文化研究』七（一九七四）が發表される一方、清水宏祐氏は「プワイフ朝の軍隊」、『史學雜誌』八一—三（一九七三）に續いて、「イブラーヒム・イナールとイナリヤーン——大セルジューク朝初期のトルコマン集團——」、『イスラム世界』一〇（一九七五）を著わした。セルジューク朝史研究は、從來、誰もがその必要性を認めながらも、史料の、語學的障害から二の足を踏んでいただけに、氏の、今後の研鑽が大いに期待される。

さて、モンゴル帝國以降についてはどうであろうか。東トルキスタンに關する一九七〇年以前の研究については、佐口氏が『岩波・世界歴史』一三（一九七一）に發表した一連の論文に要領よくまとめられるので、改めて述べる必要はなからう。唯、忘れてならぬのは、根本史料 *Tarikh-i Rashidi* の寫本（大英博物館藏 Orl. 157）が、本田實信氏によって將來されたことである。*Tarikh-i Rashidi* には、從來、英譯本でしか接することができなかっただけに、この功績は大きい。一五・六世紀のモグーリスターン史、東トルキスタン史解明の上で不可欠な史料であるだけでなく、ティムール朝や、ウズベグ・カザーフ勢力等の研究にも必須のものである。間野英二「モグーリスターン遊牧社會史序説」、『西南アジア研究』一七（一九六六）は、この寫本を活用したところに最大のメリットがある。

Tarikh-i Rashidi と並ぶ根本史料、明實錄の中央アジア關係の

記事をあつめた『明代西域史料 明實錄抄』（京都 一九七四）が刊行された。今後、内外の研究者に多大の便を與えるであろう。が、煩雜であるとはいへ、版本の違いによる異同が示されていないのは解せない。これを利用して早速、堀直「明代のトゥルファンについて」、『待兼山論叢』八一（一九七五）が發表された。實錄と前掲 *Tarikh-i Rashidi* をはじめとするイスラーム史料とを對照して、一五—一七世紀のトゥルファン支配勢力の系統を論じたものである。誤植が多いようで、轉寫の誤り・不統一が目につくのは残念である。氏には、同「カシガル汗國の成立について」、『アジア文化研究』二（一九六九）、同「明代の中央アジア——土魯番について——」、『同』三（一九七〇）があり、中村哲郎「十六世紀中頃以降の東トルキスタン社會史について」、『同』は、「アジア文化研究會」の活動報告である。

清代にはいつて、佐口透「チャガタイ・ハン家の末裔と清朝」、『東西文化交流史』東京（一九七五）は、トゥルファンに據ったチャガタイ・ハン家王侯と清朝との關係を考察したものである。小松氏の絶賛する、濱田正美「ムッラー・ビラールの『聖戰記』について」、『東洋學報』五五—四（一九七四）は、ムッラー・ビラールを通じて當時の人々の心情へと迫っていった氏の研究姿勢が、讀む者すべての心をうつ。我々は、史料紹介の中に、それを越えた、氏の歴史に對する深い洞察を讀みとることができる。そして、決して問題なしとはいえないが、フィロソフィカルな知識の裏付けが論考に重みを加えている。「歴史的背景がおろそかにされた」との批判^①もあるが、筆者はむしろ、この論說こそ、今後の中央アジア・テュルク民族史研究の、一つの方向を示すものと、積極的に評價したいと思う。

三

モンゴル以降のいわゆる「西トルキスタン」史研究については、筆者の専攻する研究分野でもあるので、節を改めて述べてみたい。この分野の研究は、わが国では無論のこと、世界的にもまだまだ遅れている。本田實信「ヘラートのクルト政權の成立」(『東洋史研究』二二—二一九六二)は、サイフィーの『ヘラート史記』を中心として、グルル人が建設したクルト朝初期について言及したものである。氏は、主として、イルハーン朝との關係においてこの王朝の成立期をとらえている。先驅的であり、かつまた、劃期的な研究である。クルト朝は、後のティムール朝とも關わってくる王朝であるが、加藤和秀「ティムールとアフガニスタン」(『北大史學』一一—一九六八)は、本田氏の論考を時代的に繼承したものと言えよう。同「ティムールのインド遠征」(『歴史における文明の諸相』東京一九七四)は、ティムールのインド遠征を、ヤズデーの『インド遠征日誌』に據って丹念に記述したもの。力作である。一方、氏は同「史料紹介」O・D・チェホヴィチ編著、ブハラのワクフ文書(『東洋學報』五二—四一九七〇)に續き、同「一四世紀前半のブハラ農村社會に關する一考察」(『オリエント』一四—二一九七二)で、チェホヴィチの發表したブハラのワクフ文書を研究し、農村社會と遊牧民との關係の究明をめざした。今後、既に刊行されているティムール朝や、「シャイバニー朝」のワクフ文書の研鑽が期待されるところである。間野英二「ティムール朝の社會」(『岩波・世界歴史』八一—九九九)は、わが國初の本格的なティムール朝史研究の論考である。

以上述べたように、ティムール朝を中心として、極めて僅かずつではあるが、當該地史料を利用した論説が現われてきている。わが國におけるこの分野の研究も、ようやく緒についたの觀がある。今後、何よりもまず、中央アジア史、或いは、イスラーム世界史の流れとも深い關わりをもつティムール朝史研究の、質量ともに充實せんことが期待される。ティムール朝時代には、中央アジア史上、最も多くの史書が書かれ、その殘存率も比較的良好である。にもかかわらず、研究者の數は極めて少なく、筆者の知る限りでは、先に掲げた加藤、間野兩氏のほか、昨年、「アジア文化研究會」で、「ティムール朝の權力構造」と題して口頭發表した岡田信弘氏を數えるだけである。ティムール朝史研究をめざす學徒の輩出せんことが切に望まれる現狀である。

それと同時に、ティムール朝の周邊諸勢力の研究が早急になされなければならない。殊に、ティムール朝を滅亡へと追いやったウズベグ族に關しては、その研究の必要性が説かれながらも、現在まで見るべき研究がない。佐口透「カザーフ・大オルダの種族集團」(『東洋史研究』二五—二一九六六)に、遊牧時代のウズベグに關する若干の記述があるのは、やはり、同氏のコーカンド汗國に關する一連の論説が見られる程度であらう。

しかしながら、一節でも觸れたごとく、ウズベグ史研究の爲の環境も、從來とは比べものにならない程良化してきている。筆者は、今後、ウズベグ民族史の研究をめざすつもりであるが、以下、一五世紀から一六世紀初頭にかけてのウズベグ族、すなわち、遊牧ウズベグ族の研究に利用できる文獻資料を、ウズベグ側のそれを中心として極く簡単に紹介し、ウズベグ民族史研究の「展望」に代えたい。

と思う。

「ウズベグ」の名稱は、金帳汗國汗ウズベグ（在位一三三—一三四一）が有名であるが、キプチャク草原の遊牧民を表示する語として初めて「ウズベグ」の名稱が使われるのは、一四世紀末の事件を記したティムール朝史料においてである。當時に關して、ウズベグ側には史料が残されていない。ウズベグ史料に記述が現われてくるのは、「シャイバーニー朝」の事實上の創始者であるアブルハイルハーン（在位一四二八—一四六八）の時からである。

(1) *Tārīkh-i Abū al-Khair Khānī*

は、一六世紀の中頃、「シャイバーニー朝」の宮廷史家マスウーディによつてベルシア語で書かれた作品である。題名が示す通り、アブルハイルを贊美すること終始しており、裝飾の多いベルシア語は讀みづらい。大英博物館所藏 Add. 26188 の寫本をマイクロフィルムで將來したが、あまり良好な寫本ではない。むしろ、『一五一八世紀のカザーフ汗國資料集』(*Manpuuasi no Hemopuu Kazaxkux Xatme e XV—XVIII sekoe, Anna-Ara, 1969*)に收録されている露譯の方が利用しやすい。

アブルハイルを嗣いで遊牧ウズベグ勢力を統合し、遂には、ティムール朝を滅亡させたシャイバーニーハーンに關する史料として、まず、一六世紀初頭に書かれた

(2) *Tavārih-i Guzide—Nusrat-nāma*

があげられる。チャガタイイトルコ語で書かれた散文作品である。天地創造に始まり、チングスハーンとその後裔の歴史、ティムールの活動等を記した後、シャイバーニーハーンの事蹟を述べている。著者は不明であるが、シャイバーニーハーンを中心とした複

数の人間によつて書かれ編纂された可能性が強いと思われる。この史料は、ウズベグ史料群の中で最も早い時期に完成されたものの一つであることや、當事者たるシャイバーニーハーンが敘述に加わっていると考えられる點などからして、シャイバーニーハーン時代のウズベグ族を研究する上で最も重要な文獻であると考えられる。

寫本は二つ（ロンドンとレニングラードに）現存するが、そのファクシミリ版が一九六七年にタシュケントから出版された。ロンドン寫本を底本として、直接入手することのできないレニングラード寫本で、ロンドン寫本の缺を補い、兩者の異同を記してあるので非常に便利である。しかし、寫眞が多少見にくいので、九七〇（一五六二／六三）年の奥書があつて、寫本としては、より、價值の高いロンドン寫本（大英博物館藏 Or. 3222）をマイクロフィルムで將來した。尙、前掲『カザーフ汗國資料集』に抄譯が收められているので参照できる。

ベレズィンが、一八四九年にカザンからテキストと露譯とを發表した

(3) *Shahāni-nāma (Iltifāriyādā)*

は、(2)の異本と考えられている。「シャイバーニーナーメ」の名を持つ作品が、現在、この(3)をも含めて三つあることはわが國ではあまり知られていない。その一つは、ヘラート生まれのベナーイーの

(4) *Shahāni-nāma*

で、ベルシア語の作品である。シャイバーニーハーンの事蹟が記述されており、内容的には(2)の記事とはほぼ平行している。寫本がソ連邦内にあるので、テキストを見ることができない。『カザーフ汗國資料集』の露語抄譯が利用できる。もう一つは、ムハンマド・サ

ーリフの

(5) *Shahbani-nāma*

で、チャガタイートルコ語で書かれたマスナヴィー體の詩作品である。九〇五〜九一一年（一五〇〇〜一五〇五／六）の事件が記されている。カーシム某によって寫されたウィーン寫本を底本として、一八八五年にヴァンペリーがテキストと獨譯とを、一九〇八年にメリオランスキーらがテキストを刊行している。兩版とも東洋文庫に所藏されている。

(6) *Fath-nāma*

は、(2)とほぼ一致した内容を持つペルシア語の詩作品で、『カザーフ汗國資料集』に露譯で收録されている。

(7) *Mihmān-nāma-yi Bukhārā*

は、シャーフイー派の神學者ルズベハーン・フンジのペルシア語作品で、九一四（一五〇八—〇九）年に起きたシャイバーニーハーンの對カザーフ遠征従軍記である。テキストは、一九六二年にテヘランから、そして、*Ursula Ott* による獨譯（部分譯）が一九七四年にフライブルグから發刊された。現在まであまり利用されていないが、ウズベグとカザーフとの關係の究明をはじめ、様々な方面での研究に、大いに利用價值のある史料と思われる。

時代が下って、一七世紀に書かれた史料として、バルフの文書管掌官をしていたワリーの

(8) *Bahr al-Asṭar fi Manāqib al-Akhyār*

があげられる。ワリーは、その役職柄、前時代の文獻を數多く涉獵したようである。他作品には見られない記述をも多く包含している。『カザーフ汗國資料集』の露譯が利用できる。

(9) *Shajara-yi Turk*

は、ヒヴァ汗國の君主アブルガズイー（一六〇三—一六三）によるトルコ語の作品である。著者が、「シャイバーニー朝」とは家系を異にするヒヴァ汗國系の出身だけあって、アブルハイルやシャイバーニーに批判的な記述がみられる。興味深い史料である。デメゾンが、テキストと佛譯とを一八七—一七四年にベテルスブルグから發表した。一九七〇年に、リブリント版が出て利用し易くなった。

以上、現在わが國で利用できる文獻資料を極く簡単に紹介したが、一五一—一六世紀初頭のウズベグ史研究には、他に、ティムール朝、サファヴィー朝、モゴリスターン汗國側の史料も利用できる。中でも、バーブルの

(10) *Babur-nāma*

は、シャイバーニーハーンと干戈を交えた當事者の目撃談として、第一級の史料である。他に、二節でとり上げた

(11) *Tārīkh-i Rashīdī*

も、モゴリスターン側の史料として、價值の高い作品である。

以上、「中央アジア・テュルク民族史研究の展望」に名を借りて、筆者自身のめざす研究の方針を述べてみた。今後の研究課題は、何よりもまず、地域的・時代的空白を埋めることにある。その爲には、研究の質的向上は勿論のことではあるが、むしろ、その量的増加がより望まれるところであろう。現在この分野で活躍している研究者が、本稿であげた諸先輩にほぼ盡きるとしたら、それは、誠にもって寒々しい限りである。研究者そのものの増加が、まず第一に

望まれるところである。

註

- ① 間野英二「回顧と展望（北アジア）」（『史學雜誌』七七—五
一九六八）二六〇頁。
- ② 榎本方雄「回顧と展望（中央アジア）」（『史學雜誌』七九—六
一九七〇）二四七頁。
- ③ 長澤和俊「近年における内陸アジア史の研究動向」（『史學雜
誌』七一—一二 一九六二）六二頁。
- ④ 榎本方雄「アジア文化研究」の創刊によせて」（『アジア文化
研究』創刊號 一九六八）二—三頁。
- ⑤ 森安孝夫・梅村垣「回顧と展望（北アジア・中央アジア）」（『史
學雜誌』八二—五 一九七三）二三五頁。
- ⑥ 山田信夫『日本に於ける蒙古・中央アジア研究小史』（金澤 一

九七〇）六二頁。

- ⑦ 羽田明「サトゥク・ブグラ・ハーン傳説について」（二—一三
頁）、小田壽典「Quadruple Billig とイスラム受容」（一四—三
三頁）。
- ⑧ 三上次男・護雅夫・佐久間重男『中國文明と内陸アジア』（東
京 一九七四）二七七—二七八頁。
- ⑨ 山田信夫「ウイグル文書…資料と研究」（『中央ユーラシア文化
研究の課題と方法』豊中 一九七五）三九頁。
- ⑩ 小松久男「回顧と展望（中央アジア）」（『史學雜誌』八四—五
一九七五）二四一頁。
- ⑪ 同右。
- ⑫ 例えば、佐口透「トルキスタンの諸ハン國」（『岩波・世界歴史』
一三 一九七一）四四頁。